委託事業実施内容報告書
令和3年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム（C）】

実施内容報告書

団体名：VILLA EDUCATION CENTER

1. 事業の概要

事業名称	多文化共生社会実現に向けた「学び合い」日本語教育推進プロジェクト
日本語教育活動に関する特定のニーズの実情や課題	当団体の主たる支援対象者はミャンマー出身者である。その中には、難民認定を受けた者、難民認定申請中の者、仮放免中の者など「難民」的背景を持つ人が少なくない。 申請時に当団体の教育活動におけるニーズは、主に以下の2点を挙げた。 （1）日常生活の質を高めるための日本語教育 （2）学び合いによる自己成長を目指した日本語教育 この2点のニーズは実施後もニーズとして存在している。 課題としては、安心安全な学びの場の確保と彼ら/彼女らが抱える不安な気持ちに寄り添いつつ、学びを支えていくことを挙げた。申請後、2021年2月1日にミャンマーで軍によるクーデターが発生し、在日ミャンマーコミュニティも大きな影響を受けることになった。安全確保を考えても、尚一層、日本での滞在の長期化が進みつつあり、安心安全な学びの場の確保がより求められる。また、こうした状況を背景とした新たな学習ニーズに対応していくことが今後求められる。
事業の目的	本事業の目的は以下の4点であった。 ①「生活者としての外国人」に安心して日本語を学ぶことができる機会を提供すること ②「生活者としての外国人」の日常生活の質を高め、自己成長につながるような活動を行うこと ③「生活者としての外国人」だけではなく、活動に関わる指導者、ビジターなどすべての人が学び合いによって自己成長し、また、多文化共生社会を形成していく主体となっていくこと ④ 日本語教育に関するオンラインセミナーを開催することによって、広く日本語教育人材、一般市民が「異なる考えや価値観を持つ他者と協働できる柔軟性」を涵養する機会を提供すること 本事業の最大の特徴は「事業名称」に含めた「学び合い」を重視している点である。学び合いは、教育活動に参加するすべての者の中で生まれる。日本語学習者であれ、日本語指導者であれ、ビジター参加者であれ、そのすべての参加者の間で生まれる。この学び合いは、多文化共生社会実現のための種になり得る。文化審議会国語分科会が平成31年3月に発表した、『日本語教育人材の養成・研修の在り方について』の中に「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」（表11）が掲載されている。その中で、望まれる「態度」として、「異なる考えや価値観を持つ他者と協働できる柔軟性を持とうとする」という項目がある。多文化共生社会実現のためには、できる限り多くの市民が「異なる考えや価値観を持つ他者と協働できる柔軟性」を持つことが肝要になる。当団体が行っている教育活動ではこうした態度を涵養するための学び合いが生まれる活動デザインを目指してきた。本事業においても、そうした教育活動を継続するとともに、人材の育成セミナーを原則オンラインで開催することで、地域を超えたより多くの方々に学び合いが持つ価値を伝えていくこと、つまり、波及性も重視した。その結果、他団体、他地域で行われる実践にも一定の影響力を持つことも本事業の目的となった。
事業内容の概要（課題をどのように解決するのか、どのような点が先進的な取組になるのか分かるように記載）	本事業では、「特定のニーズ」として、「日常生活の質を高めるための日本語教育」と「学び合いによる自己成長を目指した日本語教育」を挙げ、「課題」として、「気持ちに寄り添いつつ、学びを支えていくこと」、「個々の学習者のニーズに沿った日本語教育のデザイン」を挙げた。これを踏まえた上で、日本語学習の取組を2種類準備することとした。以下、実施した3つの取組の内容をそれぞれ述べる。 ●取組1「生活向上を目指した基礎からの日本語教室」 これまで日本語教育機関で日本語を学ぶ機会がなかった学習者に、実生活に必要な日本語の学習の場を提供した。そのような学習者は、職場や生活の中で日本語のコミュニケーションに難しさを抱えていることが多い。このニーズに対応するため、生活に必要な場面シラバスを用い、基礎から日本語を学習することで周囲とスムースな意思疎通が可能になるように工夫を重ねた。さらに日本文化や生活習慣などの解説も取り入れ、日常生活の質を高める日本語学習をデザインした。加えて、この取組は、学習者個々のニーズにも柔軟に対応するよう努めた。仕事や生活の中で理解できない日本語使用や文章、その他の疑問についても解決する時間を毎回設け、学習者に寄り添った日本語支援を目指した。 ●取組2「学び合いを重視した社会参加としての日本語教育」 学習者の日本語能力を高めることも目的としながら、学習者、指導者、ビジターなどすべての参加者に自己成長をもたらす教育活動をデザインするよう努めた。当団体が7年半（約330回）の活動の中で蓄積した教育・学習スタイルを踏まえつつ、常に改善点を検討していった。また、活動はコロナ禍の中でも安全性に留意しながら対面で行ってきたが、オンラインでの参加も取り入れた。 この2つの取り組みは、密接に連携していた。日本語の基礎を学びつつ（取組1）、社会参加の日本語能力を身につけたい（取組2）というニーズに応えるため、取組1・2は同日開催、参加費も同額で両方参加可能とした。 ●取組3 「取組の成果の発信や普及及び住民の日本語教育への理解の促進に関する取組」 「日本語教育の社会的意義を考える－学び合いから始める多文化共生－」と題したオンラインセミナーを実施し、セミナーの成果や日本語学習の2つの取組の成果を発信した。オンラインセミナーでは、在留資格や難民認定制度など「生活者としての外国人」の生活の安定性に関わる話題を学んだり、難民当事者の語りを聞いたり、傾聴の仕方をワークショップしたり、また生活者としての外国人の思いや置かれている現状に関しさらに深い理解を得るための演劇ワークショップを行った。セミナーはオンラインで実施し、日本語教育に関わる人々、多文化共生に興味、関心を持つ人々に向け、広く学びの機会を提供していった。
事業の実施期間	令和3年5月～令和4年3月 （ 10 か月間）

2. 事業の実施体制

(1)運営委員会

【運営委員】

1	伊藤 加奈子	日本放送協会　報道局報道番組センター社会番組部/ディレクター
2	加藤 めぐみ	明星大学 人文学部　福祉実践学科/教授
3	菊池 哲佳	公益財団法人仙台観光国際協会　国際化事業部/国際化推進課 交流課 係長
4	小瀧 雅子	公益社団法人国際日本語普及協会/理事
5	佐藤　安信	東京大学大学院　総合文化研究科/教授　持続的平和研究センター センター長
6	嶋田　和子	アクラス日本語教育研究所/代表理事
7	チョウチョウソー	株式会社ブライト/代表取締役
8	松尾　慎	東京女子大学　現代教養学部/教授
9	松田　真希子	金沢大学　国際機構・大学院人間社会環境研究科/教授
10	三代　純平	武蔵野美術大学　造形学部/准教授



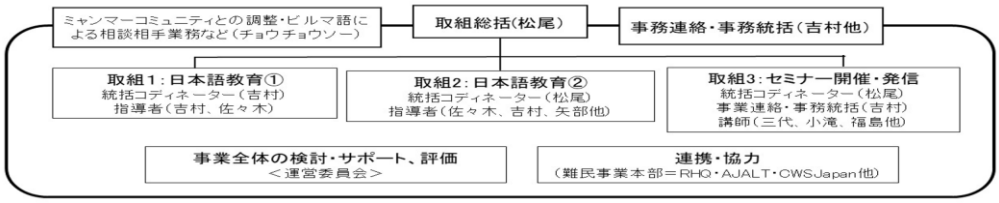
【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	令和3年5月29日（土） 10:00～12:00	2時間	Zoom オンライン	伊藤加奈子、加藤めぐみ、菊池哲佳、小瀧雅子、佐藤安信、嶋田和子、チョウチョウソー、松尾慎、松田真希子、三代純平 （事務局：吉村洋子、佐々木彩乃）	1. 文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業のプログラムC」採択事業の内容説明 2. 事業内容、実施方法、目的等の検討
2	令和3年10月2日（土） 10:00～12:00	2時間	Zoom オンライン	伊藤加奈子、加藤めぐみ、菊池哲佳、小瀧雅子、佐藤安信、嶋田和子、チョウチョウソー、松尾慎、松田真希子、三代純平 （事務局：、吉村洋子、佐々木彩乃、西村愛、五嶋友香）	1. 活動中間報告 2. 参加者ニーズアンケート調査報告 3. 活動実施状況の確認と意見交換（改善点など）
3	令和4年2月19日（土） 19:00～21:00	2時間	Zoom オンライン	伊藤加奈子、加藤めぐみ、菊池哲佳、小瀧雅子、佐藤安信、嶋田和子、チョウチョウソー、松尾慎、松田真希子、三代純平 （事務局：吉村洋子、西村愛、五嶋友香、矢部紬）	1. 今年度の活動報告 2. 参加者アンケート結果報告 3. アンケート結果の意見交換 4. 活動の意見交換（評価と分析、今後の課題など）
4					

(2)地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	・ミャンマーコミュニティとの連携・協力：当団体の副代表理事のチョウチョウソー氏が会員であるUnion of Myanmar Citizen Association（ミャンマー市民協会）と連携し学習者を受け入れるよう努めた。 ・地元コミュニティとの連携：高田馬場にある行政書士事務所「アジアンデスク」と連携し、学習者の在留資格や生活相談を行い、学習者の安心、安全な生活をサポートできるよう努めた。2021年度は、2020年度同様に、町内会との連携を模索したがコロナ禍で実施が困難であった。また、高田馬場にあるビルマ語通訳がいる「さくらクリニック」を必要に応じて紹介した。 ・多文化共生関係団体との連携：2021年度より、「新宿区多文化共生連絡会」に登録した。この連絡会では、定期的に登録団体が集まり近況を報告し合う会を持っている。その会がきっかけで連携団体となったのが、CWS Japanという国内外で起こる災害の支援活動を中心に行っている団体である。在日ミャンマー人の日本語学習、生活サポートで連携するとともに、取組2において防災ワークショップを協働で実施した。 ・難民支援関係団体との連携：（公財）アジア福祉教育財団難民事業本部（RHQ）や公益社団法人 国際日本語普及協会（AJALT）などとの情報交換など実施した。 ・日本語教員養成機関との連携：東京女子大学日本語教員養成課程との連携を継続した。本事業の日本語指導者のうち6名が同大学の日本語教員養成課程の修了生・修了予定生であった。その他、ビジターとしても課程生が参加していた。

(3)中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

本事業の実施体制	

3. 各取組の報告

特定のニーズに応じた日本語教育の実施日本語教育の実施 【活動の名称：生活向上を目指した基礎からの日本語教室 （取組1）】	
取組の目標	当団体の支援対象者であるミャンマー出身者は、難民もしくはそれに準ずる方と、技能実習生等として来日後、難民申請を行っている方に大別される。前者の場合、在住歴は20年を超す場合もあるが、日本語教育機関で日本語学ぶ機会に恵まれなかったために、何とか生活できる程度の日本語力であることが珍しくない。また、後者は在留資格が安定せず、就労にも制限があるために、将来への不安を抱えている。両者とも、今後日本で安定した生活を営むために、またより社会・地域と密接に関わっていくために日本語の習得が必要であると感じているが、その機会をこれまで得られなかった。このような学習者の背景を十分理解した上で、生活に必要な日本語能力を向上させるために効率的、かつ無理のないプログラムで、社会参加につながる学びの場とすることを目的とする。
内　　容	生活に必要な日本語能力の向上のために、主にテキストは「いろどり生活の日本語入門」（国際交流基金）を使用した。テキストでは、学習者のレベルに合わせて簡単なやり取りからスタートし、職場での簡単なコミュニケーション、問題が起った時の報告、仕事の休みの連絡、病気になった時に必要な語彙、周りの人との交流等、どれも実生活に必要な日本語を順次とりあげていった。学習者は各トピックで、これまで生活している中で理解出来なかった、あるいは曖昧だった日本語を再確認することが出来るように取り組んだ。特に会話練習を多く取り入れて、実生活でのコミュニケーションに役立つようなプログラムをデザインするとともに、日本の習慣、文化などについても各トピックごとに解説し理解を深められるように詳しく解説した。学習者から漢字学習の希望もあり、身近な漢字から適宜、学習を進めていった。 また文化庁の「つながるひろがるにほんごでのくらし」も積極的に使用した。テキストのトピックにあったシーンを選び、映像を観ることでさらに学習内容の理解と定着を図ることができた。 毎週、1回2時間の授業で、各トピックを1回または2回ずつに分けることで、仕事や家庭の状況で毎回参加することが出来ない学習者が、たとえ教室を休んでも、次週に参加しやすいようなプログラムを構成し、学習を継続しやすいように実施していった。

実施期間	令和3年5月23日～令和4年3月18日	授業時間・コマ数	1回　2時間　×　41　回　＝　82　時間
対象者	日本語を基礎から学びたい学習者	参加者	総数　17人 （受講者　13 人，　指導者・支援者等　4人）
カリキュラム案活用	生活に必要な日本語能力の向上のために、テキスト「いろどり生活の日本語入門・初級」（国際交流基金）を使用しながら、「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案を参考に学習を進めていった。各トピックは、カリキュラム案の中分類の中から、特に生活していく上でかかせない「01　健康を保つ」・「07　公共交通機関を利用する」「11　仕事を探す」「12　仕事をする」「13　仕事に役立つ能力を高める」などの内容を取り上げ、学習者のレベルに合わせて学習を進めていった。特にコロナ禍で医療機関に関する不安の声があったため、病院や薬局、また体調に関する日本語を取り上げた回を合計5回実施した。41回の授業の中で、実生活や職場で必要な日本語を段階的に学習する上で、カリキュラム案と照らし合わせて、授業をデザインする指針とした。		
使用した教材・リソース	「いろどり：生活の日本語　初級1・2」（ミャンマー語版）国際交流基金　、「漢字マスターN5」アークアカデミー編著 社会参加のための日本語通信講座テキスト、「つながるひろがるにほんごでのくらし」（文化庁サイト）		

受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	ミャンマー：13人									

日本語教育の実施内容

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名
1	令和3年5月23日（日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	2	天気	天気の話題に触れながら あいさつをすることができる	吉村洋子	
2	令和3年5月30日（日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	3	住んでいる町	住んでいる町について話すことができる	吉村洋子	
3	令和3年6月6日(日) 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	4	待ち合わせ	待ち合わせの時間と場所を 決めることができる	吉村洋子	
4	令和3年6月13日（日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	3	一緒に出掛ける	相手の経験や興味を尋ねて 誘うことができる	吉村洋子	
5	令和3年6月20日（日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	4	感想を話す	自分の感想を相手に伝えることができる	吉村洋子	
6	令和3年6月27日（日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	5	日本語の勉強	日本語の学習経験について話す	吉村洋子	
7	令和3年7月4日(日) 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	3	お願いする	～もらえませんか？を使って、 いろいろなことをお願いする	吉村洋子	
8	令和3年7月11日（日） 13:00～15:01	2	ケヤキハウス	5	日本語勉強の仕方	どのように日本語勉強しているか 話すことができる	吉村洋子	
9	令和3年7月18日（日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	4	習い事	習い事について話すことができる	吉村洋子	
10	令和3年7月25日（日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	3	日本語教室に参加する	自分の学習歴や希望を伝える	吉村洋子	
11	令和3年8月1日(日) 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	3	バーベキューの相談	誰が何を持って来るか相談できる	吉村洋子	
12	令和3年8月8日(日) 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	3	ホームパーティ	相談しながら買い出しができる	吉村洋子	

13	令和3年8月22日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	4	美味しい料理	食品表示。何が使われているか お店の人に聞く	吉村洋子	
14	令和3年8月29日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	3	美味しい料理	食べ物の感想を言う。 味覚の表現を知る	吉村洋子	
15	令和3年9月5日(日) 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	4	美味しい料理	料理の味を伝えたり、材料の質問をする	吉村洋子	
16	令和3年9月12日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	3	美味しい料理	カップやきそばの作りかたの 説明を理解する	吉村洋子	
17	令和3年9月19日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	3	仕事の連絡	職場で困ったことがあった時の報告	吉村洋子	
18	令和3年9月26日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	3	仕事の連絡	事務機器の名称の確認と使い方を尋ねる	吉村洋子	
19	令和3年10 月3日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	3	仕事の連絡	休みの連絡（日本語でメールを書く）	佐々木彩乃	
20	令和3年10 月10日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	3	仕事の連絡	仕事の連絡メールを読む	吉村洋子	
21	令和3年10 月17日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	4	仕事の連絡	持ち場を離れる時の許可を取る	西村愛	
22	令和3年10 月24日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	4	仕事の連絡	早退や休みの相談を上司とする	吉村洋子	
23	令和3年10 月31日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	2	仕事の連絡	休暇届を書く・漢字練習	吉村洋子	
24	令和3年11 月7日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	2	病院で	自分の症状を伝える・ 体の部位のことばの確認	吉村洋子	
25	令和3年11 月14日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	4	病院で	問診票を書くことができる	佐々木彩乃	
26	令和3年11月21日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	4	病院で	薬の説明やの見方がわかる	吉村洋子	
27	令和3年11月29日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	3	健康な生活	体調が悪い時のアドバイス	吉村洋子	
28	令和3年12月5日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	1	健康な生活	病気予防のポスターを理解する	吉村洋子	
29	令和3年112月12日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	4	交流する	はじめての人の家を訪問した時の挨拶等	吉村洋子	
30	令和3年12月19日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	3	交流する	自分の持ち物について話すことができる	吉村洋子	
31	令和3年12 月26日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	2	交流する	誕生日や結婚のお祝いを 言うことができる	吉村洋子	
32	令和4年1月9日(日) 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	2	交流する	贈り物の相談をすることができる	吉村洋子	
33	令和4年1月16日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	3	交流する	贈り物をもらった時にお礼を 言うことができる	吉村洋子	
34	令和4年1月23日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	3	漢字の練習	生活の中でよく使う 漢字を書く・意味を理解する	吉村洋子	
35	令和4年2月6日(日) 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	2	自己紹介	出身や家族の事など簡単な自己紹介をする	吉村洋子	
36	令和4年2月6日(日) 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	4	自己紹介	仕事の事や趣味について 少し詳しく自己紹介をする ひらがな・カタカナ	五嶋友香	
37	令和4年2月13 日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	6	レベルテスト 漢字の練習	レベルテストと漢字の練習 （読み中心で） ひらがな・カタカナ・物の名前	吉村洋子	
38	令和4年2月20 日 （日） 13:00～15:06	2	ケヤキハウス	6	私の周りの人たち	自分の出身地について話す ひらがな・カタカナ・物の名前	吉村洋子	
39	令和4年2月27日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	4	私の周りの人たち	SNSに自己紹介の書き込みをする ひらがな・カタカナ・数字	吉村洋子	
40	令和4年3月6日(日) 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	4	私の周りの人たち	身近な人の特徴をつたえることができる カタカナ・数字・時計の読み方	吉村洋子	
41	令和4年3月13日 （日） 13:00～15:00	2	ケヤキハウス	4	私の周りの人たち	その場にいない人について どんな人か話すことができる	吉村洋子	

(1)特徴的な活動風景(2～3回分)

〇取組事例①

【第9回　令和3年7月18日】
トピック「習い事」
＜学習目標＞公民館の講座の案内を見て場所や日時などの情報を読み取ることができる。
＜学習内容＞地域にはそれぞれ公民館があり、そこではいろいろな教室があることを解説。自国にも同じような施設があるか、教室があるかどうかなど話しあった。テキストの案内チラシを見てどんな教室か、曜日・時間・場所、費用などの読み取りを学習。語彙の確認後に、自分がこれまでどんな習いごとをしてきたか、またどんな教室に興味があるかをそれぞれ話し、それについて質問をしあった。次に、窓口に行き興味のある講座について質問出来るように学習した。(「〇〇教室に入りたいんですが。」など)
テキストの講座のチラシには書道教室の案内があったため、書道について解説し実際に体験した。学習者全員にとって、筆の感触と文字の縦書きは新しい体験となった。



〇取組事例②

【第27回　令和3年11月29日】
トピック「健康な生活」
＜学習目標＞体調のわるい時の対処法のアドバイスをもらったり、アドバイスできるようになる
＜学習内容＞体の部位についてのことばを確認。体調が悪いことをあらわすことば「頭が痛い」「体がだるい」「肩がこる」「二日酔い」「よく眠れない」などについて学習した。特にコロナの症状と言われる「熱がでる(高い)」「咳がでる」なども細かく取り上げた。続いて、テキストのアドバイス「薬を飲んだほうがいいですよ」や「早く寝たほうがいいですよ」等を学習した後、それぞれの症状に対してアドバイスをするペアワークを行った。最後にどのような対処法があるか全員で共有。学習者が独自の対処法を持っており、活発な意見交換が行われた。





(2)　目標の達成状況・成果(取組による特定のニーズの充足)

これまで日本語を教育機関で学んだ経験がない学習者にとって、生活や職場でのことばや会話についての学び直しを行ったことは、生活の質を向上させ、生活していく上での自信につながったことがうかがえる。実施したアンケートからは、すべての学習者が、このプログラムにより日本語が上手になった、また64%が「日本での生活ができるようになった」36%が「まあまあ出来るようになった」と答えている。独自のアンケート(ビルマ語記述式)では「新しい日本語の単語を知り、日本語も覚えやすくなりました。知識も増えて(コミュニケーションが)円滑になりました」「日本の文化や言葉づかい、書き言葉としての日本語を学べた」との回答を得た。全員がミャンマー人であり、安心できる教室という「場」で学習し、それを職場や地域でのコミュニケーションの実践につなげる一助となったことは一定の成果と考える。

(3)　今後の改善点について

アンケートからは、全員が「もっと日本語を学びたい」と回答している。また「新聞を読めるように、テレビを観て理解できるように、正しい発音で話せるようになりたい」「漢字をもっと学びたい。日本人との話し方など、日本語についてもっとできるようになりたい」という意見があり、その学習意欲に応える授業デザインが求められている。しかし、途中から参加する学習者によっては日本語レベルに差があるため、クラスを分けるなど柔軟な対応が求められている。また、運営委員会では、オンライン授業も取り入れてはどうかという意見が出された。仕事などで授業の時間が合わなかったり、遠方の学習希望者への対応も今後の課題として上げられる。

特定のニーズに応じた日本語教育の実施日本語教育の実施 【活動の名称： 学び合いによる自己成長を目指した日本語教育 （取組2） 】	
取組の目標	・学習者の日本語能力を高め、より十全に社会参加していくことができるようエンパワーメントしていくこと ・すべての参加者（学習者、指導者、ビジター参加者その他）が対等な目線で教育活動に参加し、「教える」・「教えられる」という非対称的な関係ではなく、「教え合う」・「学び合う」という関係を築き、自己成長を促すこと ・教室活動を通して、日本語教育人材の養成、研修を行うこと ・活動に参加することで、すべての参加者が今日的な社会的課題を自分事として認識すること
内　　容	（1）本教室は、本団体が、2014年から実施している活動を継続しつつ、事業評価体制を十分に取り入れ、内容を改善していった。 （2）活動の素材：NHK NEWS WEB EASYの記事を参考に記事の内容をわかりやすい日本語にまとめた。さらにその他、関連する映像などを取り入れた。 ※ ニュース素材によって、「「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的カリキュラム案について」に記載されている「2　生活上の行為の整理」の中から項目を取り上げた。 （3）活動日時：毎週日曜日午前10時から12時（正午）全41回（計82時間） （4）活動の準備：毎回、活動を大まかにデザインする主担当の指導者は輪番制。コーディネーターが準備の段階から主担当者の相談に乗り、指導・サポートをしていった。活動を通して日本語指導者の養成、育成を行った。 （5）毎回の活動の基本的な流れ ・活性化 ・わかりやすい日本語で準備したニュース記事の語彙確認と読む活動 ・ニュースに関連する映像の視聴 ・グループ活動とその発表 ・活動内の振り返り（参加者全員） ※本活動でメインとなるのは「グループ活動とその発表」である。多くの場合、正解がない問いか、正解が複数ありえる問いが提示され、参加者はそれぞれの考えを共有しあった。できる限り、日本語能力に関わらず学び合えるテーマを選ぶべく努めた。 （6）毎回の活動で必ず日本語指導者による振り返りを行った。30分から1時間近く掛けることもあった。この振り返りでは、指導者相互に担当箇所に関し、コメントをし合った。加えて、コーディネーターからのコメント、アドバイスがあり、ここでも、活動を通して指導者の養成、育成が行われた。 （7）振り返りの共有 振り返りは文字化して当日、活動に参加しなかった日本語指導者を含めて全体共有をした。振り返り記録は、第1回の活動日（2014年6月8日）の記録からすべてDrop Boxで共有されている。 （8）学習者に対するヒアリング調査を2回、実施した。

実施期間	令和3年5月23日～令和4年3月18日	授業時間・コマ数	1回　2時間　×　41　回　＝　82　時間
対象者	ミャンマー出身者、大学生、大学院生、日本語教育関係者、多文化共生に興味関心のある方など	参加者	総数55人 （受講者13人、指導者：ファシリテーター6人、支援者等：ゲスト参加者36人）

カリキュラム案活用
0302　衛生管理をする（食品保存の注意書きを理解する） 0401　事故を回避する（地域の公的機関で発行している外国人対象のせいかつ情報パンフレット等で確認し理解する） 0404　交通事故に対処する（救急車119番に通報する、警察110番を呼ぶ） 0501　避難場所・方法を確認する（この項目はほぼすべて実施しました） 0502　地震発生時に適切に行動する（この項目はほぼすべて実施しました） 0503　台風発生時に適切に行動する（この項目はほぼすべて実施しました） 0806　カード等を利用する（カードの種類や支払い方法を理解する） 2004　差別・いじめ・トラブルなどに対応する（この項目はほぼすべて実施しました） 3201　異文化コミュニケーションについて理解する（この項目はほぼすべて実施しました） 3202　異文化摩擦事例について理解する（この項目はほぼすべて実施しました） 3401　ゴミ出し（ゴミの分け方）について理解する（資源再活用について理解する、ごみ処理の仕方について理解する） 3502　地方参政権、選挙等について理解する（この項目はほぼすべて実施しました） 3702　各種補助金を申請する・受給する（補助金について知る、書類を作成し提出するなど） 3801　目標を設定する（この項目はほぼすべて実施しました） 4102　日常生活の中で学習する（この項目はほぼすべて実施しました） 4302　社会問題について理解する（この項目はほぼすべて実施しました） 4303　教育事情、学校制度について理解する（本や資料を読んで理解する） 4401　外出や余暇の計画を立てる（この項目はほぼすべて実施しました） 4801　新聞・雑誌・テレビ・ラジオ・インターネットから情報を収集する（この項目はほぼすべて実施しました）
使用した教材・リソース	毎回の活動で、2ページのワークシートを自主制作した。毎回のテーマは、そのときどき、ニュースで話題になったことを取り上げることが多く、その内容をわかりやすい日本語にしてワークシートに載せた。その他、活動ではテーマに関連する映像素材を毎回準備し視聴した。さらに、例えば防災をテーマにする際には行政が制作したハザードマップや避難場所マップ、各種資料なども準備して配布した上で活動を行った。また、人的リソースとして、中国帰国者や継承語教育研究、日本語・英語同時通訳の専門家などを招いたこともあった。

受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	ミャンマー：13人									

日本語教育の実施内容

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名
1	令和3年5月23日（日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	2	世界遺産になることのメリットとデメリット	奄美大島や沖縄本土などが7月に世界遺産になる可能性があるというニュースについて。世界遺産になることのメリットとデメリットを、住民側や観光客側から考えた。	松尾慎 五嶋友香	
2	令和3年5月30日（日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	3	手話体験・災害時に ろう者が困ること	日本で手話を話す人のために口元が見えるマスクが開発、販売されたというニュース。災害時にろう者が困ることについて考えた。	松尾慎 佐々木彩乃 西村愛	
3	令和3年6月6日（日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	3	強制労働と 児童労働	アメリカがウイグルの問題でユニクロのシャツの輸入を止めたというニュース。児童労働や強制労働に対してわたしたちができることを考えた。	五嶋友香 西村愛	
4	令和3年6月13日（日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	3	2016年11月のスー・チー氏に スピーチ	スー・チー氏が日本来訪した時のスピーチについて。5年経った今、スピーチを見て感じることは何かを話し合った。	松尾慎	
5	令和3年6月20日（日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	3	東京オリンピック・パラリンピック	東京オリンピック・パラリンピックの表彰式で使用される音楽や表彰台が発表されるというニュース。様々な工夫があり、いろいろな人の想いがあることを学んだ。	松尾慎 五嶋友香 西村愛	
6	令和3年6月27日（日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	4	「日本の英語を考える会」との交流会	ミャンマー参加者が「日本の英語を考える会」の方からの質問（日本の生活についてなど）に答えた。交流会を通して、親睦を深めた。	松尾慎 五嶋友香	

7	令和3年7月4日(日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	6	選択的夫婦別姓	夫婦別姓を認めない民法は合憲であるというニュース。選択的夫婦別姓に対して賛成か、反対かを考えた。	松尾慎 五嶋友香 西村愛	
8	令和3年7月11日 (日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	3	報道の自由	香港のリンゴ日報が廃刊に追い込まれるというニュース。権利の熱気球の活動を通して、自分にとって大切な権利を考えた。	松尾慎 佐々木彩乃 五嶋友香	
9	令和3年7月18日 (日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	4	ファシリティドッグ	病気の子どもの不安を少なくするファシリティドッグのニュースについて。人と動物の関わり合いについて考えた。	松尾慎 西村愛	
10	令和3年7月25日 (日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	4	東京オリンピックの開会式	東京オリンピックが開会したというニュース。"Super Human"の映像をみて、考えたことを共有した。	松尾慎 五嶋友香 謝霄然	
11	令和3年8月1日(日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	3	コロナ禍で入国できない留学生	待機留学生が多くいるというニュース。オンラインで日本語学校の授業に参加している方から、今の気持ちや今後のことなどの話を聞いた。	松尾慎 佐々木彩乃 五嶋友香	
12	令和3年8月8日(日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	2	防災	約3割の人がハザードマップを確認したことがないというニュース。実際に、教室の近くにあるAEDの場所を確認しに行った。	松尾慎 五嶋友香	
13	令和3年8月22日 (日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	2	最低賃金	最低賃金を28円引き上げて、全国平均給料を930円にするというニュース。生活に困っている人のために何をするべきかを考えた。	佐々木彩乃 五嶋友香	
14	令和3年8月29日 (日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	3	ワクチン接種の権利	ワクチン接種をしない子どもへのいじめを防ぐための絵本を高校生らが作るというニュース。ワクチン接種は義務か、自由かについて考えた。	松尾慎 五嶋友香	
15	令和3年9月5日(日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	2	リサイクル	自動販売機の横の回収ボックスが、ごみ捨て防止のために下からいれる形になるというニュース。徳島県上勝町の「ゼロ・ウェイスト」を紹介し、リサイクルについて考えた。	松尾慎 五嶋友香	
16	令和3年9月12日 (日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	3	ごみ問題	プラスチックのコップや皿を紙にする動きに関するニュースについて。廃材アートについて学び、実際に廃ペットボトルで小物入れを作った。	松尾慎 五嶋友香	
17	令和3年9月19日 (日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	4	新札と キャッシュレス決済	新一万円札の印刷が始ま理、偽装防止のために最先端技術が使われるというニュースについて。日本や外国のお札を顕微鏡アプリで見たり、キャッシュレス決済について考えたりした。	松尾慎 佐々木彩乃 五嶋友香 西村愛	
18	令和3年9月26日 (日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	4	町にあるユニバーサルデザイン	日本でUDタクシーを増やすニュースについて。車いす利用者が「乗車拒否」される問題についても考えた上で、町に出てユニバーサルデザインやUDタクシーを探した。	松尾慎 佐々木彩乃 五嶋友香 西村愛	
19	令和3年10月3日 (日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	3	防犯対策、顔認識カメラと人権	JR東日本の防犯対策としての監視カメラの問題に関するニュースについて。法規制があいまいな日本の実態について議論し、人権について考えた。	松尾慎 五嶋友香	
20	令和3年10月10日 (日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	5	東北の復興のためにできること	アメリカ が福島の米などの輸入規制を緩和するというニュースについて。東北のためにできることについて考えた。	松尾慎 五嶋友香 西村愛	
21	令和3年10月17日 (日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	3	やさしい日本語	「めっちゃ」や「じみに」 多くの人が使ってもいいと答えたというニュースについて。若者言葉ややさしい日本語について考えた。	松尾慎 西村愛	
22	令和3年10月24日 (日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	5	AI、ロボット	アマゾンが身の回りの世話する家庭用ロボットを年内に発売するというニュースについて。いろいろなロボットを紹介し、「弱いロボット」について考えた。	松尾慎 佐々木彩乃	
23	令和3年10月31日 (日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	3	選挙における若者の投票率、外国人参政権	日本の国政選挙の投票率が低いことに関するニュースについて。日本の選挙について学び、投票率について考えた上で、外国人参政権について議論した。	松尾慎 佐々木彩乃	
24	令和3年11月7日 (日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	3	投げ銭の問題	未成年の「投げ銭」の問題に関するニュースについて。どうして「投げ銭」にはまってしまうのか考えた。	松尾慎 五嶋友香 西村愛	
25	令和3年11月14日 (日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	3	環境問題	COP26がイギリスで開幕したというニュースについて。COP26に関する映像を視聴して学び、絵本『私のせいじゃない』を読んでさまざまな問題について考えた。	松尾慎 佐々木彩乃 西村愛	
26	令和3年11月21日 (日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	2	自動運転車のメリット・デメリット	マツダの自動運転車に関するニュースについて。自動運転車の必要性、メリット・デメリットについて考えた。AI技術の進歩と法整備の必要性について議論した。	五嶋友香 西村愛	

27	令和3年11月28日 （日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	4	ヒューマンライブラリー	世界90か国でヒューマンライブラリーが開かれているというニュースについて。ヒューマンライブラリーについて学び、お互いにライフストーリーを話した。	松尾慎 佐々木彩乃	
28	令和3年12月5日 （日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	3	路上生活者と若者	路上生活者に弁当を配る小学生のニュースについて。一方で路上生活者を襲撃する若者もいることを取り扱い、社会としてどう問題に向き合るべきかを話し合った。	松尾慎 西村愛 矢部紬	
29	令和3年12月12日 （日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	6	Church World Service Japan(以下、CWS Japan)との協働活動	首都直下型地震が発生したときにどのように行動するべきかについて。被害想定動画や避難所・避難場所マップなどを実際に見て、地震からの身の守り方について学んだ。	松尾慎 五嶋友香 西村愛 矢部紬	
30	令和3年12月19日 （日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	3	コンセンサスゲーム	雪山で遭難したときに何を持っておくべきか、グループで話し合う活動を行った。活動を通して人と話し合うこと、人の話を聞くことについて考えた。	松尾慎 佐々木彩乃 西村愛	
31	令和3年12月26日 （日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	2	2021年を振り返る	「今年の一皿」について知ると共に、参加者それぞれにとってどんな一年だったかを振り返った。活動の最後には来年の抱負を書いた。	松尾慎 五嶋友香	
32	令和4年1月9日(日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	4	ドローンとロボットを使った配達のメリット・デメリット	日本郵便のドローンとロボットを使って配達する実証実験について。人ではなくドローンとロボットによる配達のメリット・デメリットについて話し合った。	松尾慎 佐々木彩乃 五嶋友香	
33	令和4年1月16日 （日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	3	マイボトルを使いやすくするには	プラごみ削減のために行われた近畿大学のマイボトル持参の実証実験について。マイボトルがより使いやすくなるサービスを考えた。	松尾慎 西村愛	
34	令和4年1月23日 （日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	4	キャッシュレス決済について考える	中国のキャッシュレス事情や日本の状況についても学んだ。キャッシュレス決済のメリット・デメリットを話し合った。	松尾慎 五嶋友香 西村愛 矢部紬	
35	令和4年1月30日 （日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	4	中国帰国者について	中国残留邦人・中国帰国者について学んだ。戦後日本に戻ってくることが難しかった残留邦人・帰国者と、現在ミャンマーに帰ることが難しいミャンマー参加者を重ね合わせながら話し合った。	松尾慎 佐々木彩乃 五嶋友香 山崎哲	
36	令和4年2月6日(日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	2	火山の噴火による被害について考える	トンガの海底火山噴火のニュースについて。火山噴火、火山灰の被害について学び、日本で火山が噴火したときにどう行動するべきかを考えた。	松尾慎 五嶋友香	
37	令和4年2月13日 （日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	2	成人年齢引き下げ、消費者トラブル	成人年齢引き下げに伴った成人式開催に関するニュースについて。消費者トラブルについても学び、巻き込まれないために気を付けるべきこを話し合った。	松尾慎 佐々木彩乃	
38	令和4年2月20日 （日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	4	海外につながる子どもの教育	海外につながる子どもが抱えるダブルリミテッドについて。学校の支援状況の問題や親が子どもにどう接するべきかについて学んだ。	松尾慎 五嶋友香 西村愛	
39	令和4年2月27日 （日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	4	『アンネの日記』について	映画『アンネ・フランクと旅する日記』が3月に公開されるというニュースについて。『アンネの日記』やドイツの歴史について学んだ。	松尾慎 佐々木彩乃 五嶋友香 西村愛	
40	令和4年3月6日(日) 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	5	水際対策緩和、コロナウイルスに伴う生活の変化	水際対策緩和に関して留学生や技能実習生が直面している問題について。新型コロナウイルス流行に伴う生活変化について話し合った。	松尾慎 五嶋友香 西村愛	
41	令和4年3月13日 （日） 10:00～12:00	2	ケヤキハウス	4	ウクライナとロシアの戦争	ロシア軍のウクライナ侵攻に対して渋谷駅前などでデモが行われるというニュースについて。1年前のミャンマーのクーデターも含め、今わたしたちができることを考えた。	松尾慎 五嶋友香 西村愛 矢部紬	

(1)特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第307回　令和3年9月26日】ユニバーサルデザイン
ユニバーサルデザインタクシー(以下、UDタクシー)に関するニュースを扱った。ニュースでは、UDタクシーが2026年までに9万台に増えるという計画がある一方で、UDタクシーの運転手が車いすの人を「乗車拒否」する問題や運転手が車いすの人の乗り降りを手伝うために料金を高くする問題などがあることを学んだ。ニュースを踏まえたうえで、UDタクシーの運転手が車いすの「乗車拒否」する理由や、さまざまな人がタクシーを利用しやすくするためには何が必要かなどを考えた。活動の後半では、高田馬場駅周辺にあるユニバーサルデザインを見に行った。UDタクシーを見たり、実際に点字を触ってみたり、エレベーターにあるイラストを見たりして、どのような人にとって利用しやすいデザインなのかをその場で考えることができた。高田馬場駅周辺のユニバーサルデザインを見に行ったあと、参加者全員でどのようなユニバーサルデザインがあったか、改善できる箇所があったかどうかなどの意見を共有した。ニュースを読んだ後、実際にユニバーサルデザインを見に行くという活動によって、より一層理解を深めて、参加者全員で学び合うことができた。





○取組事例②

【第318回　令和3年12月12日】CWS Japan(国内外で起こる災害の支援活動を中心に行っている団体)との協働
CWS Japanとの協働で、首都直下型地震を想定した活動を行った。活動では、大規模地震発生時にどのような行動をするべきかを考えたうえで、内閣府が公開している首都直下型地震被害想定動画を視聴して、「地震から身を守る」ことを学んだ。避難所クイズの活動では、避難所と避難場所の違いや避難所でできること・できないことなどについて紹介した。さらに、「避難所・避難場所マップ」(日本語)を配布し、仮にVECの活動中に大規模地震が発生したら、どこへ避難するかを確認した。活動の後半では、「防災啓発リーフレット」(日本語)や「避難所生活のルール」(日本語、ビルマ語、ベトナム語、中国語)を配布して、参加者全員で内容を確認し、疑問に思うことや不安な点などについて話し合った。また、実際に使われている「避難所登録カード」に自分の情報を書くという活動も行った。活動終了後、参加者から「外国人として、知っておくべき防災の知識を知ることができた」、「自分の住んでいる地域の避難所マップをダウンロードしようと思った」、「以前日本語学校で防災について学んだ経験があったが、今回初めて知ったこともたくさんあった。参加してよかった」という振り返りがあった。





(2)　目標の達成状況・成果(取組による特定のニーズの充足)

取組2の目標は以下の通りであった。
(1)学習者の日本語能力を高め、より十全に社会参加していくことができるようエンパワーメントしていくこと
(2)すべての参加者(学習者、指導者、ビジター参加者その他)が対等な目線で教育活動に参加し、「教える」・「教えられる」という非対称的な関係ではなく、「教え合う」・「学び合う」という関係を築き、自己成長を促すこと
(3)活動に参加することで、すべての参加者が今日的な社会的課題を自分事として認識すること
(4)教室活動を通して、日本語教育人材の養成、研修を行うこと
　以下、ミャンマー出身参加者と日本語指導者、準レギュラー的に参加しているビジターに対して行ったアンケート調査の結果から検証を行う。アンケート調査では、活動で感じたこと、考えたこと、印象に残ったことなどを自由に記述してもらう方法をとった。ミャンマー出身参加者にはビルマ語で記述してもらい翻訳した。
(1)学習者の日本語能力を高め、より十全に社会参加していくことができるようエンパワーメントしていくこと
　日本語能力に関しては、学習者全員がこの取組によって、日本語能力が向上したと回答している。実際に、すべての学習者が日本語でのコミュニケーション能力や語彙力など向上させていることが活動を通して確認されている。
　続いて、(2)と(3)の目標を合わせて検証したい。
(2)すべての参加者(学習者、指導者、ビジター参加者その他)が対等な目線で教育活動に参加し、「教える」・「教えられる」という非対称的な関係ではなく、「教え合う」・「学び合う」という関係を築き、自己成長を促すこと
(3)活動に参加することで、すべての参加者が今日的な社会的課題を自分事として認識すること
　日本語指導者から、「VECほど自分の意見をこれほど自由に表明して受け入れられる場は、誰にとってもそうはないと思う。だからミャンマー参加者にとってもファシリテーター(日本語指導者)、ゲストにとっても大事な場になるのではないか」、「「VECの活動に参加すると、大学以外の友人や家族とはあまり話さないことを話して、学び合い、自分なりに感じたことを共有できるので、その時間がわたしにとってとても大切な時間だと改めて感じました」という回答があった。また、ミャンマー出身者からは、その日のテーマ・トピックに関し、互いに意見を言って話し合ったことや日本語指導者を含めたひとりひとりの異なるものの考え方が共有できたことが印象に残ったとの回答があった。(2)と(3)の目標も達成しつつあるのではないかと思われる。
(4)教室活動を通して、日本語教育人材の養成、研修を行うこと
　日本語指導者から以下のような回答をえた。「今年度から日本語活動に継続して参加させていただきました。毎回の活動でたくさんの学びを得ることができ、充実した時間となりました。また、継続して活動に参加し、振り返りを積み重ねることで一歩ずつ成長できていると感じます」、「午前の活動では、必ずしも楽しい話題だけではなく、センシティブなトピックなども扱いますが、心のどこかで必ず「楽しむ」気持ちを忘れないようにしようと思えるようになりました。そう思えるようになったのも、活動に参加する回数を重ねていって気づけたことだと思います」という回答からは継続して参加することによる自身の内面の変化や成長が綴られている。また、「活動では、ワークシートや時にカード、ホワイトボードを用いて作業をするため、オンライン参加者もだれも取り残さない活動にするためにどう工夫したらいいのかなど、参加メンバーと話す機会が持てたことも、私自身の学びになりました」という回答からは、参加者全員が学べる場作りを学んでいったことが述べられている。このようにこの取組が、日本語教育を担う人材の養成の場となっていることがうかがえる。

(3)　今後の改善点について

今後の改善点に関しては「今後の課題」と受け止めているが、以下の2点挙げられる。
(1)発展的で持続可能な運営体制の構築
(2)より多くの学習者に学びの機会を届けること
　以上の2点に関しては、本報告書の最後の箇所である「改善点，今後の課題について」で述べる点と重なっている。
　(1)の「発展的で持続可能な運営体制の構築」に関しては、今年度はじめて見えてきた課題ではなく、本活動を8年近く継続してきた当団体が常に抱えてきた課題である。日本語指導者の大半が大学院生であるため、指導者の入れ替わりに対応する必要がある。この点に関し今年度は学部生の大学院進学希望者の育成も実施してきたが引き続き課題となる。
(2)の「より多くの学習者に学びの機会を届けること」に関し説明する。当団体は、コロナ禍においてもできる限り対面での活動を継続してきている。対面だからこそ、安心、安全な、顔の見える場作りができるとの考えによる。しかし、オンラインをうまく組み合わせることで、これまで対面での参加が難しかった学習者の希望に応えられる可能性もあり、今後の課題として検討課題となるであろう。

取り組みの成果の発信や普及及び住民の日本語教育への理解の促進 【活動の名称：日本語教育の社会的意義を考える一学び合いから始める多文化共生一 （取組3）】

取組の目標	日本語教育関係者はもちろん、多文化共生に興味、関心を持つ一般市民に向けて「生活者としての外国人」の背景や多様性、また、社会の中に置かれた状況を理解する場を提供する。それによって、「生活者としての外国人」とその他の市民が対等な目線でともに生きることができる社会づくりの一歩となることを目指す。
内　　容	本取組は大きく2つに分けられる。 （1）日本語教育に関連するセミナーの実施 （2）本事業の成果の発信 （1）の「セミナーの開催」に関しては、Villa Education Centerがこれまでの活動を通して培ってきた「生活者としての外国人」に向けた日本語教育の理念を基礎に、日本語教育に関わる人々、多文化共生や難民支援に興味、関心を持つ人々に向けたセミナーを開催した。 （2）の「本事業の成果と発信」に関しては、当団体のホームページ及びFacebookで実施報告を行った。 以下、セミナーの内容に関し、説明する。各回のテーマは以下のとおりである。 第1回 「もう一度考えてみよう―入管制度と難民認定制度」 第2回 「語りを聴くということ：インタビューの体験ワークショップ」 第3回 「ミャンマーを想う～チョウチョウソーは今、何を語るか～」 第4回 「移民は何を想うか―演劇による共感的理解の体験―」 第5回 「生涯学習としての日本語―難民の定住支援プログラムの実践から―」 第6回 「言語政策と言語教育の間で―シティズンシップ教育としての日本語教育―」 第1回のセミナーでは、生活者としての外国人が置かれた状況の知識を得ることを目標とした。第2回のセミナーでは、生活者としての外国人の思いをどのように受け止めていくことができるのか、聞き手/ 話し手/ 観察者の立場をワークショップで体験した。第3回のセミナーでは、難民当事者であり、ビルマ人コミュニティのリーダー的存在の一人であるチョウチョウソー氏の語りを聴いた。第4回では、第2回、第3回のセミナーを受け、「共感、エンパシー（empathy）」や「共感的理解（empathic understanding）」をテーマに、移民の思いや考えを演じる演劇ワークショップを行った。第5回では、生涯学習という観点での日本語教育のあり方を学んだ。第6回では、言語政策からみた日本語教育をテーマに、「外国人材の受入れ・共生に関する関係閣僚会議」「日本語教育参照枠」など、最近の日本の外国人政策、言語教育政策環境について考えた。

開催時間数	総時間　13時間	内訳	2時間 × 5回 3時間 × 1回
参加対象者	大学生から日本語教育関係者、多文化共生や難民支援に関心のある方々が参加した。	参加者数 （内 外国人数）	454人（ 13人）

受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	2	2	8							441
	ドイツ（1人）									

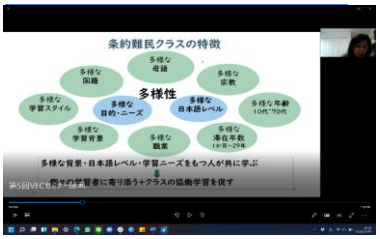
活動の実施内容

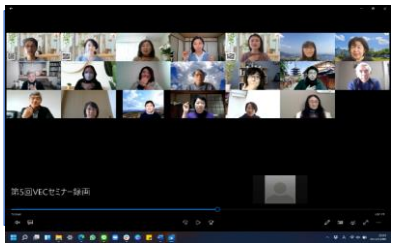
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	テーマ	概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名
1	令和3年6月26日 （土） 19:00～21:00	2	WEB会議ツール ZOOM	145	「もう一度考えてみよう ―入管制度と難民認定制度」	在留資格や在留外国人数、外国出身者をとりまく制度の概要について講師から話があった。 制度上における課題について参加者と考えた。	加藤 丈太郎 氏（早稲田大学）	
2	令和3年9月25日 （土） 10:00～12:00	2	WEB会議ツール ZOOM	26	「語りを聴くということ ：インタビューの体験ワークショップ」	講義後、グループに分かれインタビューを体験した。インタビューをする/ される/ 観察するという体験を通じて、 多文化社会の中で、他者の話に耳を傾けるということの意味を考えた。	三代 純平 氏（武蔵野美術大学）	
3	令和3年10月30日 （土） 19:00～21:00	2	WEB会議ツール ZOOM	98	「ミャンマーを想う ～チョウチョウソーは今、何を語るか～」	講師から、ミャンマーの軍事政権時代のこと、民主化以降のこと、そして軍によるクーデターと現在の状況に関し、 ご自身の体験や想いについて話があった。セミナー後半では質疑応答の時間を設けた。	チョウチョウソー 氏（NHK国際放送アナウンサーほか）	1名（早稲田大学）
4	令和3年11月27日 （土） 9:30～12:30	3	WEB会議ツール ZOOM	23	「移民は何を想うか ―演劇による共感的理解の体験―」	「共感、エンパシー（empathy）」や「共感的理解（empathic understanding）」をテーマに、参加者が演劇ワークショップを体験した。 移民の人々がその生活においてどのようなことを考えているかを想像し、議論した。	飛田 勘文 氏（芸術文化観光専門職大学）	1名（山梨学院大学） 1名（関西学院大学）
5	令和4年1月29日 （土） 10:00～12:00	2	WEB会議ツール ZOOM	40	「生涯学習としての日本語 ―難民の定住支援プログラムの実践から―」	「難民への日本語教育」について、講師の実践例を交えた話があった。 参加者はプロソディーの日本語教育を体験し、ことばを獲得することの意味を考えた。	小瀧 雅子 氏（公益社団法人国際日本語普及協会）	
6	令和4年2月19日 （土） 10:00～12:00	2	WEB会議ツール ZOOM	122	「言語政策と言語教育の間で ―シティズンシップ教育としての日本語教育―」	言語政策と言語教育の関係を講師から説明した上で、「外国人材の受入れ・共生に関する関係閣僚会議」「日本語教育参照枠」など、 最近の日本の外国人政策、言語教育政策環境について考えた。	福島 青史 氏（早稲田大学）	
7								
8								
9								
10								

(1)特徴的な活動風景

○取組事例①

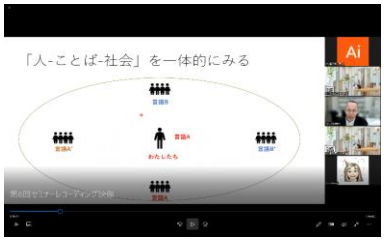
【第5回　令和4年1月29日】
「生涯学習としての日本語―難民の定住支援プログラムの実践から―」をテーマにセミナーを開催した。
国により早くから日本語教育の体制が整えられてきた分野のひとつである「難民への日本語教育」について、その概要や課題について講師から話があった。セミナー後半では、講師が行っている「プロソディーの日本語教育」を参加者も体験した。現場でどのように学びがおきているかについてや、「道具」や「知識」としての日本語（ことば）ではなく、「自己を表現する」ための日本語（ことば）の重要性を考えた。セミナーを通して、ことばを獲得することの意味を参加者で考えた。

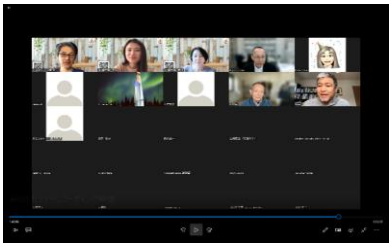




○取組事例②

【第6回　令和4年2月19日】
「言語政策と言語教育の間で―シティズンシップ教育としての日本語教育―」をテーマにセミナーを開催した。
国家レベルの話のように思える言語政策だが、地域、職場、学校、家族といった、よりミクロの次元の環境にも適応が可能である。そして、言語教育は言語政策の重要なツールの一つであり、シティズンシップ教育として位置づけることもできる。セミナーでは、言語政策と言語教育の関係を講師から説明した上で、「外国人材の受入れ・共生に関する関係閣僚会議」「日本語教育参照枠」など、最近の日本の外国人政策、言語教育政策環境について考えた。セミナー後半では、質疑応答の時間を設けた。継承語教育についてや地方自治体、教育機関の役割について質問があった。





(2)　目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

本取組は、日本語教育関係者だけではなく、多文化共生に興味、関心を持つ一般市民に向けて「生活者としての外国人」の背景や多様性、また、社会の中に置かれた状況を理解する場を提供することを目的としていた。その観点でいえば、参加者数が454名を数え、なおかつ、参加者が日本語教育関係の高度な専門家、在留外国人支援に長く携わってきた方から、こうしたことに興味関心を持ち始めたばかりの市民や学生たちまで幅広かったことを踏まえると参加者に関しては狙い通りの幅になったと考えられる。内容的にも参加者に対するアンケートからはどのような背景を持つ方からも、新たな学びの場となったことが示され、質疑応答の時間が十分に取られたことに対する肯定的な評価が目立った。

(3)　今後の改善点について

本取組は、日本語教育関係者だけではなく、多文化共生に興味、関心を持つ一般市民に向けて「生活者としての外国人」の背景や多様性、また、社会の中に置かれた状況を理解する場を提供することを目的としていた。その観点でいえば、参加者数が454名を数え、なおかつ、参加者が日本語教育関係の高度な専門家、在留外国人支援に長く携わってきた方から、こうしたことに興味関心を持ち始めたばかりの市民や学生たちまで幅広かったことを踏まえると参加者に関しては狙い通りの幅になったと考えられる。内容的にも参加者に対するアンケートからはどのような背景を持つ方からも、新たな学びの場となったことが示され、質疑応答の時間が十分に取られたことに対する肯定的な評価が目立った。

4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

本事業の目的は以下の4点であった。
①「生活者としての外国人」に安心して日本語を学ぶことができる機会を提供すること
②「生活者としての外国人」の日常生活の質を高め、自己成長につながるような活動を行うこと
③「生活者としての外国人」だけではなく、活動に関わる指導者、ビジターなどすべての人が学び合いによって自己成長し、また、多文化共生社会を形成していく主体となっていくこと
④ 日本語教育に関するオンラインセミナーを開催することによって、広く日本語教育人材、一般市民が「異なる考えや価値観を持つ他者と協働できる柔軟性」を涵養する機会を提供すること
本事業の最大の特徴は「事業名称」に含めた「学び合い」を重視している点である。学び合いは、教育活動に参加するすべての者の中で生まれる。日本語学習者であれ、日本語指導者であれ、ビジター参加者であれ、そのすべての参加者の間で生まれる。この学び合いは、多文化共生社会実現のための種になり得る。文化審議会国語分科会が平成31年3月に発表した、『日本語教育人材の養成・研修の在り方について』の中に「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」(表11)が掲載されている。その中で、望まれる「態度」として、「異なる考えや価値観を持つ他者と協働できる柔軟性を持とうとする」という項目がある。多文化共生社会実現のためには、できる限り多くの市民が「異なる考えや価値観を持つ他者と協働できる柔軟性」を持つことが肝要になる。当団体が行っている教育活動ではこうした態度を涵養するための学び合いが生まれる活動デザインを目指してきた。本事業においても、そうした教育活動を継続するとともに、人材の育成セミナーを原則オンラインで開催することで、地域を超えたより多くの方々に学び合いが持つ価値を伝えていくこと、つまり、波及性も重視した。その結果、他団体、他地域で行われる実践にも一定の影響力を持つことも本事業の目的となった

(2) 目標の達成状況・成果(取組による特定のニーズの充足)

日本語教育を実施した取組1・取組2と日本語教育に関連するテーマでオンラインセミナーと事業成果の発信を実施した取組3に分けて述べる。
取組1と取組2に関しては、「生活者としての外国人」だけではなく日本語指導者を含めたすべての参加者が学び合える活動を志向して取り組んだ。取組に関し、ミャンマー出身参加者と日本語指導者、準レギュラー的に参加しているビジターに対して行ったアンケート調査の結果から検証を行う。アンケート調査では、活動で感じたこと、考えたこと、印象に残ったことなどを自由に記述してもらう方法をとった。ミャンマー出身参加者にはビルマ語で記述してもらい翻訳した。ミャンマー出身参加者に対しては、文化庁規定の多肢選択式アンケートも実施した。まず、取組1と2に参加したミャンマー出身者に関し、文化庁規定のアンケートとVEC独自のアンケート結果から検証する。文化庁規定のアンケート結果からは、取組に対する満足度や日本語ができるようになったという実感が高いことがわかった。ただし、ミャンマー出身者は一般的に教師を非常に敬う文化的背景をもっているため、この結果を過信せず、謙虚に受け止める必要がある。次に、VEC独自のアンケートからわかったことをまとめる。参加者は、その日のテーマ・トピックに関し、互いに意見を言って話し合ったことや日本語指導者を含めたひとりひとりの異なるものの考え方が共有できたことが印象に残ったようである。また、そうした活動を通して、新たに単語を覚え、コミュニケーション能力が高まっていったとの回答もあった。在日ミャンマー人の困難などについて話し合ったり相談したりできたという指摘もあり、取組が互いの生活を支え合う場として機能していたこともわかった。日本に住むためには日本語が重要であるということがわかったという回答も複数あった。これらの結果から、取組1と2の目的・目標である、「『生活者としての外国人』に安心して日本語を学ぶことができる機会を提供すること」、「『生活者としての外国人』の日常生活の質を高め、自己成長につながるような活動を行うこと」が概ね実現できていることがわかった。
取組1と2に参加した日本語指導者に対しても調査を実施した。以下、その結果を抜粋し検討する。「VECほど自分の意見をこれほど自由に表明して受け入れられる場は、誰にとってもそうはないと思う。だからミャンマー参加者にとってもファシリテーター(日本語指導者)、ゲストにとっても大事な場になるのではないか」というように居場所としての活動の意義を述べる記述が数名から寄せられた。安心、安全な場作りを目標にしていたので、その目標を達成したものと思われる。また、取組1に関し「日本語に関しての疑問を気軽に質問できる場だと思いました。少し日本語が上手なミャンマー人が通訳で先生と学習者を助けているのもとてもいい空間に思えました」との回答があった。これも「『生活者としての外国人』に安心して日本語を学ぶことができる機会を提供すること」という目標の実現を表しているコメントといえる。さらに、「継続して活動に参加し、振り返りを積み重ねることで一歩ずつ成長できていると感じます」、「VECの活動に参加すると、大学以外の友人や家族とはあまり話さないことを話して、学び合い、自分なりに感じたことを共有できるので、その時間がわたしにとってとても大切な時間だと改めて感じました」との回答からは、「『生活者としての外国人』だけではなく、活動に関わる指導者、ビジターなどすべての人が学び合いによって自己成長」できる場作りをするという目標がある程度達成されていることがうかがえる。
続いて取組3に関し成果を検証したい。取組3(オンラインセミナー)は全6回、行った。テーマとして、「入管制度・難民認定制度」や「聴くことのワークショップ」、「難民当事者の語りを聴く」、「演劇による共感的理解の体験」、「生涯学習としての日本語」、「言語政策と言語教育」を取り上げた。全体で621名の申込者を数えた。参加者が100名を超える回もあったが、できる限り、参加者にも発信してもらう機会を設けるよう努めた。毎回、必ず参加者に対しアンケートを実施した。その結果を一部紹介する。
オンラインセミナーでは、参加者が求めている、知りたい情報や知識を提供することも一つの役割であると考えていた。「外国人労働者および難民申請をしている外国人の方の実態がよくわかった」、「異なる意見を話し合いで調整するスキルが民主主義に不可欠というお話から、クーデター後の出口のヒントまで大変貴重なお話でした」、「政策という観点から日本語教育を捉える視点をわかりやすく説明していただき大変勉強になりました」などのコメントがそれに相当している。と同時に、できる限り、参加者主体のグループワークなどを取り入れるように努めた。「内容盛りだくさん、グループに分かれてのワークも楽しかったです」、「語りをきくということについて、もう少し考えてみたかったのでとてもいい機会になった」、「異文化理解のために、知識からのアプローチではなく、感情と身体を使う演劇アプローチに興味がありましたが、あらためてとても可能性があると感じた」などのコメントから参加者主体のワークに一定の成果があったことがわかる。全体としては、セミ
ムーの目的である、「日本語教育に関するオンラインセミナーを開催することによって、広く日本語教育人材、一般市民が「異なる考えや価値観を持つ他者と協働できる柔軟性」を涵養する機会を提供すること」という目標は達成できたものと考えられる。一方で、課題も見いだされた。セミナーの講師には参加者の背景が様々であるので、テーマに関することに少し興味を持ち始めたばかりという程度の参加者にもわかるように話していただけるよう伝えた。実際に講師にはそうした目線で語ってもらえたのだが、質疑応答では、「内容は興味深かったのですが、研究者間のやりとりだったからか、私には言葉や表現が難しくてついていけませんでした」ということもときどき起こった。このあたりの点が今後の課題になるかと思う。
取組3のもう一つの柱として、「本事業の成果の発信」を掲げていた。ミャンマーコミュニティではソーシャルメディアの中で、facebookがもっとも利用されているので、facebookで日本語とビルマ語で情報発信するとともに、団体のホームページでも発信を行った。具体的には、毎週日曜日に行われる取組1・2の活動の内容を日本語とビルマ語で発信した。また、取組3のセミナーの広報は、当団体のfacebookページ、ホームページだけではなく、他団体のMLやfacebookなどで行ったりした。セミナー参加者にアンケートでどのようにセミナーのことを知ったか尋ねているが、その結果から、他団体のMLやfacebookでの広報は一定の成果があったことがわかった。

（3） 地域の関係者との連携による効果，成果等

学習者の確保に関しては、当団体の副代表理事のチョウチョウソー氏が会員であるUnion of Myanmar Citizen Association（ミャンマー市民協会）と連携し学習者を受け入れるよう努めた。また、ミャンマーコミュニティではソーシャルメディアの中で、facebookがもっとも利用されているので、facebookで広報し、それを見て参加した学習者もいた。

地域での多文化共生関係団体との連携としては、「新宿区多文化共生連絡会」に登録した。この連絡会では、定期的に登録団体が集まり近況を報告し合う会を持っている。その会がきっかけで連携団体となったのが、CWS Japanという国内外で起こる災害の支援活動を中心に行っている団体である。在日ミャンマー人の日本語学習、生活サポートで連携するとともに、取組2の日本語活動において防災ワークショップを協働で実施した。

本来、2021年度は教室がある高田馬場駅周辺の町内会、自治会と協働し、地域住民との交流をはかるとともに、地域住民が在留外国人の存在に理解を深める機会の場作りをする予定であったが、コロナ禍が収まらないなか、なかなか進めることができなかった。これは、今後の課題としたい。

（4） 事業実施に当たっての周知・広報と，事業成果の地域への発信等について

周知、広報などの発信はできる限り、日本語とビルマ語の両言語で行った。学習者の募集に関しては、先にも述べたが、ミャンマーコミュニティではソーシャルメディアの中で、facebookがもっとも利用されているので、facebookで広報し、それを見て参加した学習者がいた。取組1と取組2の日本語教育活動は毎週日曜日に実施したが、活動後、その内容をfacebookにて日本語とビルマ語の両言語で毎回、発信するよう努めた。それとともに、当団体のホームページにも活動報告を掲載した。取組3で行った日本語教育や多文化共生に関連するセミナーの周知、広報に関しては、本団体のホームページやfacebookで伝えるとともに、学会や多文化共生活動系団体のメーリス、日本語教育関係団体のfacebookページなどで行った。また、最終的な事業成果に関しては、本団体のホームページにて公開を行った。

（5） 改善点，今後の課題について

本年度の取組を通して、そして、企画評価運営委員会の委員による指摘で見えてきた今後の課題と改善点は以下の3点である。
（1）発展的で持続可能な運営体制の構築
（2）より多くの学習者に学びの機会を届けること
（3）発信の方法、内容の充実、改善

（1）の「発展的で持続可能な運営体制の構築」に関しては、今年度はじめて見えてきた課題ではなく、本活動を8年近く継続してきた当団体が常に抱えてきた課題である。日本語指導者の大半が大学院生であるため、指導者の入れ替わりに対応する必要がある。この点に関し今年度は学部生の大学院進学希望者の育成も実施してきた。また、当団体が組織化し事業規模が大きくなるにつれて事務作業を支える運営体制の構築と維持も課題となっている。
（2）の「より多くの学習者に学びの機会を届けること」に関し説明する。当団体は、コロナ禍においてもできる限り対面での活動を継続してきている。対面だからこそ、安心、安全な、顔の見える場作りができるとの考えによる。実際にはゲスト参加者や日本語指導者はオンラインでの参加も増えつつあり、首都圏以外や海外からの参加もときどきある。企画評価運営委員会の委員からは「オンラインをうまく組み合わせることで、これまで対面での参加が難しかった学習者の希望に応えられることもある」との指摘を受けた。（1）に挙げた「運営体制」の問題もあり、すぐに事業の変化や規模の拡大を行うことはむずかしいが今後の課題として受け止めている。
（3）の「発信の方法、内容の充実、改善」に関し、企画評価運営委員会の委員からは、ミャンマーコミュニティに向けての発信は、facebookなどでこまめに実施されていることを評価された一方、「日本の社会側（ことに若い人たち）に、より強く広く発信できることが課題」との指摘を受けた。一般に日本の若年層は、facebookをあまり利用しておらず、より広い層に発信していくための創意工夫をしていくことが求められる。この点は、大学院生を中心とする日本語指導者とも相談の上で、進めていきたい。

（7） その他参考資料

①＜取組2＞活動ワークシート(3件)
②＜取組3＞セミナーチラシ(3件)
・2021年11月27日第4回VECセミナー：「移民は何を想うか ―演劇による共感的理解の体験―」
・2022年1月29日第5回VECセミナー：「生涯学習としての日本語 ―難民の定住支援プログラムの実践から―」
・2022年2月19日第6回VECセミナー：「言語政策と言語教育の間で－シティズンシップ教育としての日本語教育－」
③日本語活動・日本語教室募集チラシ(1件)